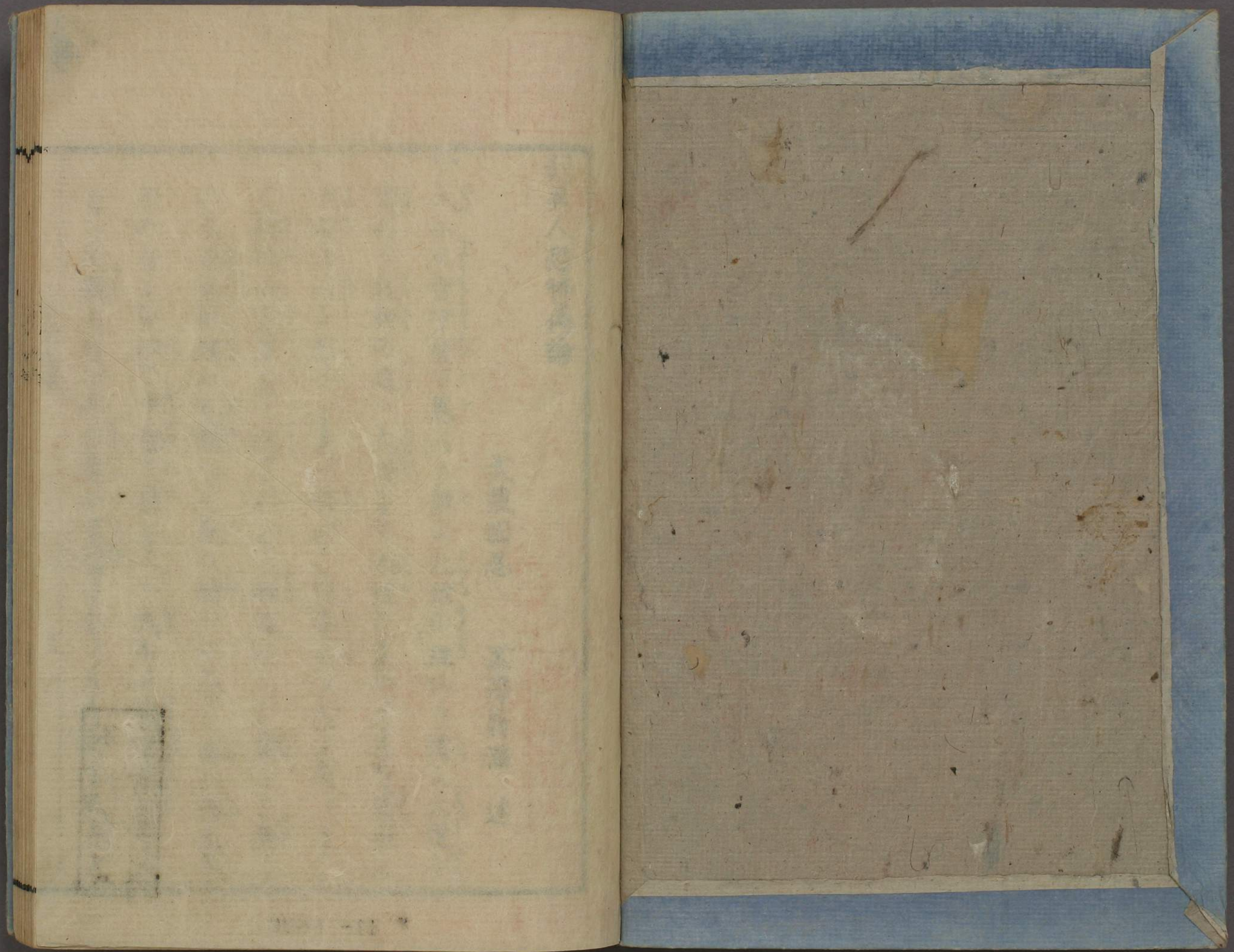
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

洋学文庫
文庫8
C 211
3



聖堂書籍館蔵書之印

刻異人恐怖傳論

武藏國忍　黑澤翁滿　述

一人ハ上智中智下愚あり理ハ大理小理あり道ハ大道小道あり我神の道ハ大道ハ大理なるまゝこゝを學ぶハ大智の人ハあらざるまゝ信がゝ記事多きあるゝ〜さる神代の古事など記されゝる樣のいとゝ靈〜く異〜きを今世ハ現ハ比較べゝ見る時ハいとゝ〜思ひ係ぬ事のみなるを以て中智下愚の人ハ大かゝ寓言虛誕なりとして疑ふほどゝハ未竟ハ言齊〜あどもさそなる然きど

勝伊氏寄藏書

不許賣買二百部限

41- 6620

も古ら霊しく異しきハ原来天地の形狀なるもバ唯上智の人ばかりぞ神代ばかりの傳説ハ真の大理あるこゝをを深く遠く慮て信て今世ハ物事の光景も此神の道ハ漏ぬこゝをバ覚るなれ儒道ハ小理を説くこゝを判然なれど中智の人ハ信悦ぶ道あるを世ハ中智の人多くバかりづゝ弘く行たるゝ別るゝなるは漢土の道と所謂伏羲ハまれ堯舜ハまれ其元ハ人の考へ定めるる事なり次第ハ世の態ハ合せく然もなるなく人ハ信べきやゝハ説爲るものなるもバ中智ハ人ハ一向ハ

打憑こゝて此道の外ハ道といふ物ハなるなど如くゆを思ひ言ふをり然まるも其ハ皆人智ハ考へ出るる道なきバ狡黠ぶちく却ては世の理義ハ合ハぬ所もなるを以く上智の人ハ猶肯たぬ類も多く下愚ハ其道の煩累ふ困じて悪く厭ひなるもなるなれど佛道ハ空理を小さく説く故ハ下愚の耳ハ入易くして下賤婦女子の類ハ信仰する者多きなるなれ佛道ハ甚く異様なるものゆく並てハ虚偽を以く悪俗を嚇し嗔して矯直さんと構へられ空理の中より種々の相を現

ど来りて何事も此道より漏ぬさはふ説為つて天地萬物の理を三世因果ふ盡しゝるぶ如くなりても其根源ハ悉く虚寓の方便より出るゝ故ゝ上智中智の人ハ其虚偽を憎み其拙陋を嘲りてをきゝ信容る人もあれを唯下愚なんさる根源を知るべくもなゝ徒ら只管ふ其説喩さる事を信実とゝ受て又あれ道と尊み崇まんはゝ愚癡ゝ凝固する類ぞ多うゝ我大御國ハ神道ゝて事足りて具そうゝ國柄なりゝを中頃儒佛の道渡りて来てより已来事の瑣細ゝ委曲くなりゝ善き事あれふ

しもあゝるほど亦國體を損ずゝる事も少うゝ試ふ其由をいそぐ儒道ふく善き方の事ハ上古ハいとうに省約ていうゝを文飾の事出来てよりは君の尊さも親の辱さと今一際さる事と知き又其文字ゝて萬の事を書記しふどさる事れ便利なるふとなり然きでん何事も然一箇づゝ理をいひきてゝ瑣細ゝ穿鑿りて究めんとするうゝふ自然ふ詐偽といふ事も發りて又さう便利あるふ就てハ奸謀を企る媒ともなりて却てハ唯一さぐふ誠実ありて素朴なりゝ上古ゝ及ばぬ事どもゝ多し佛道ふて善

き方も愚昧なる俗男女の暴人なども死て行くさきの事などゝ驚き懼まて聊心を改むるもあり又其作善追福の業などゝく形のづゝ心の和む事ゝるなどの類ゝるゞ〳〵然まてゝん此ハ惣て悪らめるめゝ為ゝ益あらゝこゝく素より善人ゝふハ用ゐゞゝ道あるに他を誹謗し自を押立る所より頑愚の心を凝結して我慢徒黨の風を發し終ゝハ天下の災害となりし事ども多し然ハあまてゝも此三の道相行まして世々を重祢来つゝゝ近き年頃より蘭學といふ事行れ始て西洋の國風を学ぶ事となりぬ其道ハ大理ゝ懸てハいとゝく疎き物なれゞ大智の人ハ笑ふ事も多々ゝまゝど小理のうへを究理して人ハ耳目を驚ろく事多々ゝまゝ今世ハ人氣ゝ合ふらゝ此學ゝ志ゝくめのれく一向ゝ流行して蘭學をせざる者まゝく頻ゝ眼前ハ小理ゝ伏して日本の國風を忘まやうゝ成へなまるはいとゝく歎ゝき事ハ限といふゞ〳〵約莫西洋諸國の風ハゝゞ眼前の物事をハゝさはゞふ理を推究めゝて中ハて竟ゝハ天地の大なる形状をも推測ゝて是ゝく萬理を盡しゝうと思へる事なれと

其ハ〳〵人の智慧算術の届る限ることあまた真ふ
霊〳〵く異〳〵く妙なる理ハ知得べき際ふけ〳〵もバ此天
地の初發まゝかく天地の動く理人身の生まれ出る縁故
まゝ其生活く理などハ猶奈何とも知るべきよしなし
然まれども其國人の智ハ極競ひ考へるわのなまじバさ
すがに用ある調度の機関まゝ物と物と交へく製る藥
などハ意外ある事もけまじバ中智下愚の人どもハ皆驚
き崇びて真ふ似ある道なりと思ふあるさまで猶克考
ふまぼその調度藥物ふども大〳〵ハ無ても事闕ぬ物

なるふ徒ふ人の精力を費〳〵てたゞ〳〵ハ驕奢の基と
ハる事もけまじバ上智ハ人ハ更ふ採用することなし惣
て邪智ふ長け柔弱ふ流るゝ皆是外國風ふ移まるも
のなゝ儒佛の輩ハ國恩を忘まて漢天竺の為ふ　御
國ふ仇するゝ者を昔よりまたゞふ有とも聞ぬ
を蘭学の徒ハやくもすまじバ西洋の為ふ國恩を忘まて
おふけなる事を為出　國家より罪せゝまてる類なる
ゝとけゝぬる人氣を釣ることハ他道々よりも巧なり
といふべく抑日本ハ武國ふゝく人ものゝ猛く雄々

〳〵其強きこと萬國に勝まさる國風なる筑上のもいと
るゞ〳〵はぎく外國の弱き風よ押移り近比ハ殊ニ西
洋人の真似をして好事とのみ思ふやうになりたるか
つてゞたにも歎〳〵紀俗習といふべし近古までも日本
人の強うして事ハ源平より已来世々に軍記戰爭の書
を讀ても知るべくまた此書の中にもケンプハが驚き
歎じて記〳〵る長崎の賈人濱田兄弟が事あるにつけて
考ふべし懲て外國の書どもを見るに日本人のごとく
敵に向ふ最初より神水を呑て死を究め人ハ北とも北

じ人ハ引とも引じ唯君の為家の為に千騎が一騎かな
るまでも太刀の刃に續うんほどは斬死にもせるべしと
風ハ絶て一箇も記〳〵るを見ば其中の魁ぶちしる者
を一人二人討るまバ残まるは蜘蛛の子を散さぶ如く
逃亡る狀なるゝ其根柢利慾の為より起りて忠魂義膽
の乏〳〵紀國柄に因るなるべしさまバ豊臣太閤の朝鮮
を攻伐ひらる時僅に肥後半國の主なりける加藤清
正朝臣の篭らまつる蔚山の城を明朝鮮の全國に力を
盡〳〵て攻〳〵るよりなるもと陷〳〵得ずして徒に食攻ふ〳〵

餓疲せるゆゑ猶乗入る事をば得せで竟ハ援兵の
為ニ斬崩さるゝなどいとゝ怯き事いふ
ばかりなしさハ明朝鮮の弱兵どもなるゝバ西洋諸國の
兵とハ異なりあどもいふばかりなるゝどかのをゝ明より
憑こゝて西洋邊の兵をも傭ひ来るゝ遠國の使者ども
来ル居るゝを駈催るゝて大砲を打せなどゝるゝ狀の彼處
まて記る書ハ所見るゝも共ハ手痛き戦ハゝをで逃
散るゝ景迹をもて頼むに足ぬ事をば知ばし又同時唐
嶋の戦ニハ加藤嘉明朝臣拔駈るゝて僅ニ五人乗るゝ小

舟ハゝく敵三百人ばかり乗るゝ大船ハ漕者飛入るゝふ
引るゝ弓をばふ放ち得ぜ皆おめ〳〵斬屠らるゝるゝ
いかばかり微弱き朝鮮人なりとも然ばかりの多勢ハく
打負べき理ニハあらぬれど勇武ハ勢の多少ニハよらぬ
唯魂の利鈍ハよる物なれバ思ひ切るゝ敢死の勢ハ氣
を奪るゝて敢なくかゝる負たゝばせ〳〵ハで有ばこそ約莫か
くれ如くなる事どもを今人の常ハ思ひ言ふあるゝは
ばもと比較べても見るゝば國の為君の為ニ御大事と
あらんをもにさる蛮人どもハ打負て徒ハ家の恥を残

大砲の音ゝ聞懼して逃て帰らんと思ふ人やあるべき
惣て　御國ゝ生まれ人ハ自然ゝ強きこれを和魂といふ
今人ゝとても各此魂ハ持ながら外國の為ゝ覆ハれて有
ども無ぎ如くなるは口惜き限なるべや此和魂といふ
事も　御國の古學ひらけてより人々頻ゝいふ事のやう
なれども古くよりもいひ事ゆて今昔物語ゝ明法博
士助教清原善澄といふ人の盗人ゝ殺さる事をいへる
段ゝざんはいみじかりけるこそ〳〵ひなる
うりなるものゆく云云と見えたり拭はるも恐惶き御事

なれども今の現ゝ　今上皇帝禁中の御學問所ある
御學則ゆも和魂の事を專ときさせ給へる由是を兼り
又大江戸の　遠の朝廷ゝ蘭學ハ御取用なりといふ
こゝ令制させ給へる由是を兼て共ゝ大ぢく尊く有
難く覚ゆるゝ上げてと　上ゝ上ゝハ如此有　大御意
御座さるの成下ゝ下ゝて已ゝ意のまゝゝ得も得知
ぬゝを喧囂しく轉ゝ慷慨さゝ此書を世ゝ弘
くゝてさる輩ゝ目を醒さめんと思ふハ聊赤心報國
の微意ゝなり

一世よある事ハ何事も　國家の御制度ハまゝなるものなるべバ下ゞ下とゝてハ少かゝいふべき物ハいとゞ況て津々浦々の防人ハ事なゝぶ至てハそもゝ國家ハ御定ハう且深き御思慮御座まゝて嚴ゝに備へさせ給ふ御事なれバ毫ゝも外より窺ひ知奉るべき事なゝねど弥下ゞ下とゝく左右論ひあゞすべき際ハハう〳〵唯日本ハ強く外國ハ弱し殊更　君ゞ御稜威もて幾千萬の異國船寄せ来るとも事もれく討平らげさせ給ふんずゝむと　國家を憑りゝく思ひ委ね奉

アて已々ゞ産業ハ心をいま世を安らゝに暮をべゝ事なゝ茂近き年比アメリカイギリスなゝの船ゝも時々参来る事あゝに就て其身ハも相應しゝぬ市人村客の輩ハゞまでおのゞゞ産業も忘きて唯其事をいひといひ論ひと論ふ事ども第一　上ハ憚らゞ日本の英氣を塞ぐゝ當アて聞棄ゞゝ事のゝ多し上ハも云る如口を噤ゝてあゝむ者ハいふまゞもなゝきども若志ハう〳〵者ハかゝるをうよゝ人の心ハ如くまざんやうに假令日本ハ弱くゝも強しといんゝて本意なるべゝれ

況ていちんや外國ハ弱く日本ハ強きこと古今其跡挙て筭へ難し其ゞ中ゝも弘安四年といふ年ゝかの漢土を悉皆伐役へく奪ひ取ゝ蒙古の忽必烈といへる王十餘萬の軍兵を渡しおこせく攻ゝ寄ゝ四國九國の武士どもゝ度々戦ひ負終ゝハ神風の為ゝ船を覆されて絶ゝ三人生て本國へ帰ゝ申ゝ此事を太田道灌の書ゝ寄ゝいふ徒然草といふものゝ評じて唐人と蒙古人との強弱ハ唐人の弱きこと論を俟ず日本人と蒙古人とを比ぶゝふ神風の為ゝ船を破らるゝ後も猶

三萬餘人鷹嶋ゝ在ゝを日本人押寄て戦ひ〳〵ハ悉く生擒きぬいくゝり戦ひ疲まゝとも我國の人ゝハ三萬餘人悉皆生擒る事ハいるべゝ是少こと蒙古人の弱きを知ゝとやうにいゝ実ゝ然る事ゝ此事を元史ゝ徵ゝに曰八月一日風破舟五日文虎等諸将各自擇堅好船乘之棄士卒十餘萬于山下衆議推張百戶者爲主師號之曰張惣管聽其約束方伐木作舟欲還七日日本人来戦盡死餘二十三萬爲其虜去云云と見えゝ侯ハ神風を免まゝるハ悉く捕へらまゝく誅ゝまゝ〳〵なるべし此

より前文永十一年十月おも蒙古高麗の軍を併せて一萬五千ばかり 對馬壹伎の嶋々へ襲ひ来りて小對馬小々國府の地頭宗右馬允助國一族郎等八十餘騎をめく馳合せて散々に戦ひ壹伎おくハ守護代平内左衛門尉經高百餘騎少て出迎へ戦ひて共に潔く討死せり其後小九國の軍士大勢押渡りて蒙古の軍を駈散せしに同月の廿一日神風大に吹起りて賊船多く巌石に碎くまし辛うじて高麗に逃帰まり是を以ても想ふべし繞に八十騎百騎の小勢にて一萬五千の大軍に向ひて氣を呑まざ戦ひて死ぬるハ我 大御國の武士ハ甚だしく猛き事ぞ其神風も弘安の度ハくなくて文永の時にもあやまりしばかり事をさまりぬ今ハもはら萬に一にも然る事ハ無しよハ 國家の命を蒙りて數萬の兵士手痛き戦を遂て討伐め追攘ん事ハいふよやハ及ぶ我 神國の御稜威違ふことなく文永弘安の如き神風も必頻に吹起りて賊を平げ給ふ事毫も疑ふ色事を切に思ひ憑み奉りてあるべくこと我一下ゞ下りて論ふべき事を喧囂しく街巷に唱ふる

を聞くふ其謂ふ所種々ふ分まるゝ或ハ云異國といふ
中ふも今世ハイギリス威勢を得て數百艘の軍艦をあて
天下ふ縱横し國々を攻伐つゝと駁〳〵其向ふ所破ら
ぞといふ事なゝ其舟の廣大なる事海ふ浮びく山の如
く是を海城といふ又其船の堅きゝと海底の巖をも衆
崩をわどなるをいうなる大砲も打抜く事あるゝ又
其船ふ近づく時ハ巖壁ふ向ふが如くなるまゝバ翅なくてハ
登り難し此ふ乘る異人ども帆綱をあやあゝ事巧ふ
て追風ふも逆風ふも疾走るゝゆ意のまゝなりそれふ

加ふるに蒸氣船といふ火船をも自由ふなゝこゝ人の
目を驚うゝ大洋を陸よりも便利と心得る異人ども
炮術ふ鍛煉〳〵る事ハ是亦目を驚ゝだうふく大
炮小炮一艘ごゝふ數限なく携へゝれど此船どもの向
ふ所防ぎ戰ふ能ハ術あるこゝなゝさまバ漢土も戰ひ
負て彼が屬國となりゝゝと今ハ日本を攻んとく先一二
艘づの船どもを物ふ托へく此慶彼慶の湊々ふ來ら
むるなり僅ふ一二艘の船ハ來まるゝに所の騷動大ゝ
あゝざるふを數を盡〳〵て寄來る事もいゝゝとやあゝん

かくやあんなど人の恐懼るゝやうなる事を悼る所
もなくいひあてたやうには皆かの蘭学者流の癖ふて已
ず西洋の事ふ委曲きを誇ア且彼方を主張して人を嚇
そひゞ心得あるを奇を好むハ世人の習なるまで聞續ぎ語
續ぎて何の辨へもなくいと驚々しく唱ふゑり寛仁大
度の　國家の御目よりハ童兒の戯れ如く御覧じて聞
食流させるふべゝ免まど若正ゝふ事あゝん時の為を
思へず人ふ臆を招く事もあゝんゝと密ふ眉を顰む
どちなども有なるべゝ其ふ就て或ハ又云船と砲とハ

彼ゞ得ゝる所ゆく御國人の得ざる所なり其得ざる所
をゆく彼ゞ得ゝる所ふ向ふハ譬へば已ゞ師ゝる人と
藝を爭ふゞ如くゆくいくゝても及び難き理の見ゆる
よゝ疊の上ふ舌戦ゆと敢なく蘭学者どもゝ勝こゝ能
得ぎおけづゝゝ和魂を損ふ端となる事あれバ船と炮
とハ姑く止て日本流のひゝ責ふ攻あば海城といふとも
何ゆどの事ゝ行るべき彼ハ粧飾めゝ嚇て流あまバ日
本流とハ甚異なゝ親打るれども乗超え子打るまども
乗超えといゆゞ如き手痛き戦ハ日本の外よハ曾てある

こゝかく是ぞ則日本の勇武は海内に溢まてる慶あれば
然らん時には氣を呑まく彼が粧飾の大炮も何も打得
ざゝん事必然なり約莫合戰ハ氣を以て第一とする事か
て強か器械は長短よハ因ぞ況て大炮などを頼こて勝
負を決すべきものかあゝ筒口を揃へゝる大炮の中
へと轡を並べく馳入ん事元亀天正の比は軍立は如く
あゝんよハ大炮あゞ頼む軍ハ更か放つかも至らゞゝ
てひゝ崩か崩るべきこと鏡か照して見るゞ如し又嚴し
く搆へゝる城中へも蟻附して乘入る勢を以せバ鐵壁

の如き大船なりとも乘取ん事何の難き事ゝハらん
かは弘安の古も河野六郎通有といふ人も阮墻を橋と
して蒙古ゞ船か乘移り大友散位藏人といふ人ハ纜か三
十騎を率て敵船か乘入共か大ゞ紀功名して首數多捕
て回アぬさきバ昔より嘉明朝臣の唐島は船軍の如き
戰ぞ我　御國風の軍なれバ彼かいゝぞりの大炮巨艦
有とても畏るゝふハ足ぞ君の為祖の為か必死の勇力を
盡さん我　御國の武士か對してハ西洋諸蛮の賊ども
かの唐島かて韓人らゞ刺さる箭をゞか放ち得ぞして

打負さわらん事の如くなるべしはきバ異國よりの數多の軍艦を押向て　御國のいざ御大事とあらん時ハ柔弱き婦女も出火といへバ覺えず膂力の出るが如く常ハ隠まてる勇武も顯はれのづから日本流ハ手痛ク戦と成て終ハ打平げん事ハ中々ハ安くるとゝまじ今ハ如く一二艘づの船どもハうかさく来るハつけくハ下どもなど彼此ハ事よりハ小迫合の起るまじ扨ハ物ハ〻ハ〻然らん時の為を思へバ船と炮との主客ハ論なく衆人の和魂を損ふ蘭学者ハ流言こそ大じく　御國の

弱きともなく除ゝ〻バいとゞく此和魂を鎮むる為ハ國家ハ本来種々の御備ども嚴ふ〻れバ船と炮との外ハ如此有御備もありといふ事を衆人ハ見せも聞せもするよりもがれなどもいひ或ハ又云遠く漢土の昔を考ふるハ元の至元といへる年の間より明の嘉靖といへる年の末まゝ倭寇と唱へく甚じく驚き懼き殆國中の騒動なりし事漢土朝鮮の書どもハ大概年々記ざるこゝもなく明の中比ハ至てハ殊ハ甚じく此災害ハ罹て國民の死亡國用ハ費も殺しかりしハ其防くゝ術

をもさはぐゝ小議論ゝる狀実小驚ゝ紀事あゝふ
我　御國の書小ハ曾てかゝる事の所見ゝる事あゝされバ
たゞ四國九國の浦々嶋々ハ暴人どもの世ハ亂小為術
なくゝして彼處へ渡ア行く盜賊をせゝたゞハ事ありし小
彼處の暴人ども其を據ゝて却て案内ゝ導きて同
じやう小盜賊をせゝなゝべゝといふり事の善悪ハ姑
く置く是小ゝも日本人の武く雄々ゝ紀こゝハ知まゝ
アさばき治平の世ニ不意出来ゝ事ありしゝふ彼處小
て甚く驚た恐まゝんもゝ理なれよハ非るゝ　さて是

小依て考ふまゝバ近来参来る異國船ども何まも其國の
王命なりとおゝしよりゝふまゝど疑無ゝともいひ難ゝる
たゞ若かの漢土ハ倭寇小等ゝ紀賊船などゝあゝバ来る
毎小誘き寄て鑿となゝ其船を焼棄るバ屢續く船も無
るたゞく立地小根を断く國の愁を拂ひ清むべし日本の
強きこゝハ海内ニ溢まゝるゝ上小日本海の荒き事も
他海の類小あゝゞさまゝバ輙く攻難き事ハ彼ゞ能知る
處なり縱令彼王國力を盡ゝて漸小攻得ゝりとも彼小
損多くゝて益ける事ゝ素より損益をのく主とする

戦なくふさる不便の軍を思ひ發せべくなくハ海賊の凝あくに非ざさるハ西洋の書ふ載る所ふ因て彼国々ハ国風を考ふるに大く其國用ハ常ふ乏しき故ふ諸国ふ渡り行く交易をなく其中ふたよく弱くと見ゆる国ふ対ハ押領する事あど有くハ聞ゆるど原来其産物貨財を得んとするまでの事なれバ損益を以て根柢とすることハいふも更あり此ハ遠き境ふ軍せんとて先國用を費くて押来らんなどの事ハ大く有まじく覚ゆるバ有りさて又其戦争の事あど記くゆて

各國の人數を考るに國力を盡くくんと聞ゆる時も僅ふ二三十萬ハ上るハ出ず我全國の軍勢ふ比べ見るバいとくく寡く敢あくる事どもなるバ假令王命あれどとく恐るく あて足ざれど防禦の術ふかなり有べし

左ふも右ふも今の如くあく年を經らず倭寇ふ悩くく漢土のごとく大じくる國の費ゆく何よりも忌くくる御大事あるどくかるまじハ葉を分ても考へまくくる事なりあるも云ひ上ふもいへる如くおあけなる御事どを下ぶ下とくて云云よ論へる罪くて免き難くれどと

是等ハ神儒佛の道々ふ心をよする輩あゞの　國恩を
思ひ我を忘まてかの蘭学者流ふ爭へる説どもなゝバ
津々浦々の防禦人あゞれ心得の端となゝん事もある
べく且和魂を鎮むるまゝずゐぶんよゝ事と聞ゆれど
猶世ふ弘く云せまゝくこゝておぼゆる
今世西洋舶来の書とて人々爭ひく持栄さてかの國風ふ
魂を奪ゝ書ゝ類ハあゝで此書ハ蘭人ケンプルゞ
口よりゝ正ゝく我　大日本の國風を天下ふ比類なゝ善
き國風なりと讃称へ又御國人の強きゝを是も天下

ふ比類なゝ怖き称へゝる書なり外國人の眼ようを
さぐりふ見ゆる　御國ふ生まて却て彼ゞ虚飾の威
ふ惑さまて恐ゝハ愚昧ハ遺憾き限なゝゞや予按ふ
蘭学頻ふ行ゝふ就ては其学せざる者まで西洋風
深く心ふ染着く何事も彼を勝まりと思ひ真似ゝ羨む
今世の俗習なまバさる輩の耳ハいろやうに論解て
も容易く所念を飜さめれハあゝで況て皇國學する
輩なゞのいゝ事ハ不負魂ぞと心得くなりゝふ傍痛
き事ふさへ思ひ言ふゝり然るに是ハ蘭人のいへること

なほ疑ふ者なく此上もあれ證據あり　御國の勝
まして強く尊く萬の國に秀ぬる事を今の人に悟らむ
るは此證據に及あのなれば此度世に廣くなるべ
なほ是を見是を味ひ　國恩は有難く辱き事を辨へ
知ず和魂の鎮ともなる由あらば大じ幸といふべし
さて此書ハ蘭人ケンプルが記るべシケレイヒンギハンヤツパン
日本志といふ書の中より抄出して長崎の譯語家志筑
意ふ忠雄が飜譯したるなり當時書中の意を採て假に鎖國
論と題號せしハ全く忠雄がなるよし譯例はいへ

た作者の意ふもはらざる故に今又更めて異人恐怖傳
と號けつ異人といひ傳といふ漢字のうへふたたて決
めて論誤ぐ人有めど別に思ふ旨もある上に俗人に通
ぬ易うしめんとて聊も熟字の法ふハ拘らず唯寫本
ゆく數多の年を歴る故に誤字脱字いとく多く讀解
難ぢ所ぶども有しを眼の及ぶ限ハ改め且譯者假字ヱ
尓乎波の格を知ずして猥雜ありしをバ聊補ひ正し
て寫本少て見知らん人怪しむべらべ

嘉永三年庚戌三月